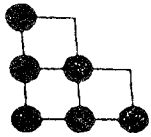
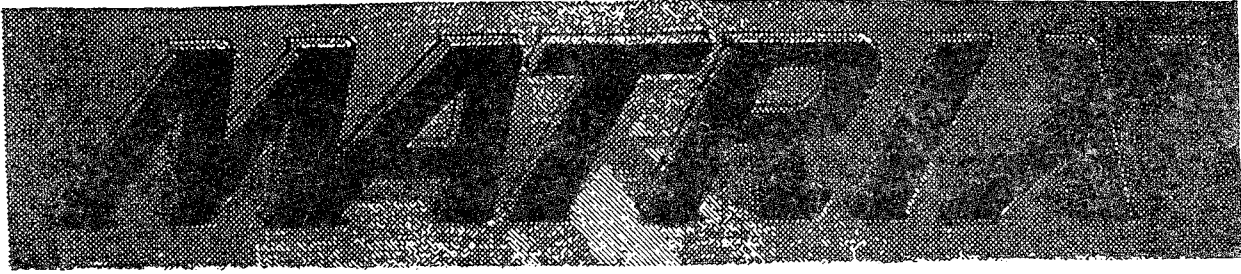


火曜サスペンスの「罪」

著者	齊藤 了文
雑誌名	Matrix : 海上交通システム研究会ニューズレター
巻	58
ページ	37-37
発行年	2007-07-01
URL	http://hdl.handle.net/10112/6730



No.58

海上交通システム研究会ニューズレター

Newsletter of Marine Traffic System Forum

目次

(第94回例会 海上交通安全の人的問題 講演会関連記事)

- ・ 第94回例会概要 村上 馨
- ・ 講演資料 海上交通システムにおけるヒューマンエレメント 古荘 雅生
- ・ 講演資料 BRM(Bridge Resource Management)の現状と課題 世良 亘
- ・ 講演資料 海難事故に関するヒューマンファクターの影響の分析 西村真太郎

- ・ ヒューマンエラーの恐ろしさ 赤木 新介
- ・ 聴診棒やテストハンマーの昨今 石田 憲治
- ・ ベテランの左転・衝突事故 岡本 洋
- ・ 海上安全と船員の専門家倫理 神田 修治
- ・ 火曜サスペンスの「罪」 斉藤 了文
- ・ ブリッジにおける船長と水先人 柴田 康彦
- ・ 個人・組織の本分は「幸福」の追求 田淵 丈雄
- ・ 船舶システム私見 山村 晋一郎

(一般記事)

- ・ 鉄道の高速化を考える 赤木 新介
- ・ 陸上養殖システムの実現を 田中藤八郎
- ・ 三題噺：お酒、番船競争、萱野三平 寺田 政信
- ・ パーシャルフロートによる免震医療施設の建設を 長安 豊
田中藤八郎

- ・ 会報
- ・ PR 神戸大学大学院海事科学研究科の新設について
- ・ PR 神戸大学海事博物館

火曜サスペンスの「罪」

関西大学 齊藤了文

火曜サスペンスは面白くて、よく見ていた。

2時間でドラマが終わるのはやる気のなくなった頭には丁度いい。連続ものを見る元気はなかなかない。しかも、起こる事件は違っていても、終わり方が予想できるので、(水戸黄門)のように、安心して見られる。

普通、殺人事件が起こり、それは差し当たり隠された恨みによることが多い。警察かそれに関わる素人探偵が事件を解決する。最後に、海辺の断崖のあたりで犯人と対峙し、犯人が心のうちを打ち明けるとともに、最後の犯行を試みるがそれに失敗して、もしくはそれを断念して、警察につかまる、というのが典型的である。

この場合、3つのことがポイントになる。一つは、(うらみなどに基づいて)意図的に犯行が行われている。二つ目は、警察(もしくはそれに準じた人)が問題解決をする。三つ目は、犯人が思いを吐露することによって、動機が明らかとなり、視聴者に何となく腑に落ちる結末になっている。この告白と共に、犯人にとっても社会との和解が成し遂げられることになる。つまり、語ることを通じて恨みがある種緩和されることになり、逮捕も不自然でなくなる。

このように分析しても、火曜サスペンスは面白いが、これは犯人逮捕の物語である。これを、事故の事例にまで拡張することはできるか。日常の感情論からして拡張はされやすい。

しかし、それをやっていいのだろうか。

ここで疑問が起こるのは、人工物を作り、その人工物が事故を起こす場面を考えているからである。この人工物が船の場合には、船長が全て責任をとればいい、かもしれない。

船長が意図的に船を動かしていると考ええると、違反した行為は船長の意図の元に行われるからだ。これは、火曜サスペンスと同じ枠組みで考えられるかもしれない。

しかし、少し大きな船になるとたくさんの人が関与する。実際に舵を取ったり、エンジンを動かしたりする人の調整が必要になる。しかも、高度なシステムになると通常の制御はやれるようになっていく。ここで、システムを作る場合のミスとか、実験を徹底しなかったための問題が起こるかもしれない。複雑な原因の絡み合いがある。

この場合も、犯人探しをして、罪を悔い改めるように仕向けるのが、当然の方向なのだろうか。「動機」を追及し(陰謀説や政治的意図を強調したほうが「深い」ようにも見えてしまう)、警察が原因を発見し、謝りもしない悪人(経営者などが取り上げられる)には社会的制裁として罵声が浴びせられている。

マスコミなどでは、結局は人災だった、という言い方をする。つまり、理論的説明よりも、人間を表に出そうとする。かわいそうな人を取り上げて、共感を呼ぶような番組の作り方をし、取材をする。この方が視聴率が取れ、読者に受ける紙面づくりにつながるからだ。

殺人事件でもないのに、人工物の事故の問題を扱う枠組みが同様に構成されるのは、視聴率を稼いできた火曜サスペンスの「罪」だとも言える。